

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：32674

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02382

研究課題名（和文）越境するファッションの理論構築と国際協働の推進

研究課題名（英文）Transboundary fashion: building theoretical frameworks and promoting international research collaboration

研究代表者

高木 陽子（TAKAGI, Yoko）

文化学園大学・服装学部・教授

研究者番号：60307999

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ファッションが、デジタルメディア技術の進歩に伴い、国家や地域の境を越えて新たな表現を生みだしている文化的状況に焦点をあてた。国内外の研究者、学芸員、実践家を分野横断的に集めて6回の国際セミナーTransboundary Fashion Seminarを東京で開催し、一次研究発表と意見交換をおこなった。

その結果、今日のファッションの多様な定義、実践、美学を蓄積し、ファッション言説の西洋中心主義を批判し、ファッションのグローバル化を再考した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、グローバル化に伴い激変するファッションの現状と文化としての意味を、日本を基盤とする国際セミナーで議論し、英文書籍として発信するものである。西洋の近代性とアイデンティティーに基づく従来のファッション理論から脱却し、ファッション研究の将来の方向性を国際的に提案する点に学術的貢献が認められる。ファッションを通して、近代の植民地秩序に基づく不平等なグローバルな力関係を明らかにし、国民国家の文化的な境界保護や差別に異議を唱える点に、本研究の社会的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：This research project focused on the cultural environment after the development of digital media technology, in which fashion is creating new expressions when crossing national and regional boundaries. Gathering a global and multi-disciplinary group of researchers, curators, and practitioners, the project organized six international seminars in Tokyo entitled Transboundary Fashion Seminar, to exchange on primary research and opinions. As a result, it accumulated a range of fashion definitions, practices and aesthetics of the present time, and criticized the Eurocentric fashion discourse to reconsider fashion globalization.

研究分野：芸術学

キーワード：ファッション テキスタイル グローバル化 国際研究者交流 芸術と産業 芸術学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ファッションは、芸術を産業に応用した文化であり産業である。20世紀末より、日本のファッション産業の生産部門は人件費の安い途上国に移転し、産業の空洞化が問題となっている。世界規模では、ファストファッションが大量消費を促進し、コピー商品が出回り、流行のスパンが早まっている。デジタル技術の進歩に伴い、素人が瞬時に世界中の多数の多様な人々に評価され、店がなくても試着なしでも商品が売れる状況が生じている。

このようなファッションのグローバル化を分析する初期の研究に、Sandra Niessen, Ann Marie Leshkovich, Carla Jones 著 *Re-Orienting Fashion: The Globalization of Asian Dress* (Bloomsbury, 2003)があるが、デジタル革命前の世界を対象にしている。地球規模の制作、生産、流通、展示までを論じた Giorgio Riello, Peter McNeil 著 *The Fashion History Reader: Global Perspectives* (Routledge, 2010)は、脱植民地主義を目指しているものの、歴史学の立場からの論文集である。多様な文化圏の研究者たちによる複合的・学際的アプローチの共同研究が今日求められている。

申請者はこれまで、科学研究費：基盤研究(C)(一般)平成26～28年「越境する現代日本ファッションに関する基盤研究」の研究代表者として、1980年代より個性を表現するメディアとなったファッションが、多様な芸術ジャンルと相互依存すると同時に国境を越える時に新たな文化的表現が生まれる「越境」的な問題に注目し、英語を会議言語とする Transboundary Fashion Seminar を2014年に立ち上げていた。そこで、ファッションとデザインの地理的・文化的越境について研究テーマを共有できる研究グループを国際パートナーとして、日本を拠点とする国際セミナーを連続開催することで、ファッションのグローバル化を再考して日本から発信できると考えた。

2. 研究の目的

ファッションは文化的産物であり、誰もが毎日接する個性を表現するメディアであり、芸術を産業に応用したクリエイティブ産業である。グローバル化とデジタルメディア技術の進歩に伴い、衣服デザインの域を超え、写真、音楽、映画、演劇、ダンスなど諸芸術と相互依存し、国や地域の境を越えて新たな表現を生みだしている。しかし、時代と地域を個別的に考察する従来の服飾史的方法で、アイデンティティ、技術革新、コミュニティ形成にまで関わるファッションのグローバル化を大局的に分析するには限界がある。

本研究は、以上の問題を解決するため、国際研究者コミュニティを構築し、将来必要となる地球規模の議論の基盤となる理論と場を整備するものである。具体的には、本研究では、ファッションのグローバル化に焦点をあて、東京を拠点とする Transboundary Fashion Seminar をプラットフォームとして、多様な学術領域出身の先進的な英語圏やフランス語圏の研究グループと国際協働して、調査、研究発表、議論を行い、21世紀のグローバル化とサステナビリティへの配慮、デジタルメディア技術の進歩に対応したファッション理論を提案するものである。

東京で連続国際セミナーを開催することは、二つの意味で価値がある。グローバル化の問題は、西洋の近代性とアイデンティティに基づく西洋のファッションシステムの覇権に関わる問題であることが予想される。西洋中心主義に基づく従来のファッション理論から脱却し、ファッション研究の将来の方向性を国際的に提案するためには、会議の場、空間を非西洋に設定することも必要であろう。

さらに、我が国のファッション産業に目をむければ、素材生産、縫製の両面で「日本」製が消え、産業の空洞化が急速に進行している。学術領域から日本文化、知財としてのファッションの価値を発信することが緊急課題である。日本のファッション研究をグローバルな場に引き出す

ために、セミナーでは、ワークショップ、資料や展覧会見学、東京のエスノグラフィー収集までおこない、日本のファッション・クリエイションの豊かさを広く海外の専門家たちに示す。

本研究により、消費者のファッションに対する意識の変革を促すとともに、将来のデザイナー、研究者、編集者など、ファッション文化に関わるクリエイター輩出を促し、文化産業、「クール・ジャパン」の多様な側面、そして文化大国としての日本の統合にも恩恵をもたらすことが期待できる。

3. 研究の方法

ファッションのグローバル化についての研究者コミュニティ構築と理論構築をめざし、研究代表者が主宰する国際セミナーTransboundary Fashion Seminarを基盤にシンポジウムを開催する。一次研究の発表と議論セッションのほか、資料や展覧会見学、実践的なワークショップ、東京のエスノグラフィー採集などを行い、日本のファッション・クリエイションの観察、実体験を促す。

小規模の自主企画セミナーのほか、毎年1回は、先進的な英語圏・フランス語圏の研究グループと共催する大規模なシンポジウムを企画する。

平成29年度はフランス国立科学研究センター(CNRS)の現代人類学・学際研究所(IIAC)、社会科学高等研究院(EHESS)のSeminar Anthropology of Fashion Worlds、平成30年度は、Research Collective for Decolonizing Fashion 研究グループ、平成31年度はICOM(国際博物館会議)のコスチューム部会を共催パートナーとする。インターネットを使った国際研究発表公募を導入し、地球規模の参加を促進する。

以上を通して、欧米圏にとどまらない多様な地域出身の美術史、デザイン史、人類学、文学理論などの研究者や学芸員や実践家をひろく集め、一次研究の発表とディスカッション、ワークショップ、見学会などをおこない、国際協働と理論構築を推進する。

成果は英文書籍として出版するほか、HPを通してファッション文化の豊かさを広く一般に公開する。セミナーの準備的研究会議をとおして、博士課程学生や若手研究者が、グローバルな学術経験を積む場とする。

4. 研究成果

(1) 主な成果

本研究では越境するファッションをめぐる6つの観点(グローバルな視点から見たバティック、ファッションとアートの関係、ファッションデザイナーの実践と理論、ファッションのグローバル化再考、今なぜKimono展か?、着付けの美)から国際セミナーを開催した。

Transboundary Fashion Seminar 4.1 Batik in Global Perspective(2017年10月25日、文化学園大学)では、Dr. Maria Wronska-Friend(ジェームスクック大学、上級研究フェロー、オーストラリア)を招き、東南アジア起源のバティックが、19世紀後半の植民地交易の結果グローバルに広がり素材や染織技術や柄を変容させ、今日にいたるまで特にヨーロッパとアフリカ地域のデザインにインパクトを与えている経緯について研究発表と議論を行った。

Transboundary Fashion Seminar 4.2 Art in Fashion, Fashion in Art(2018年3月3日文化学園大学、3月4日国立新美術館)では、Dr. Anne Monjaret(フランス国立社会科学高等研究院 研究ディレクター)が主宰するSeminar Anthropology of Fashion Worldsと、日仏共同セミナーを共催した。芸術と産業や社会が複雑に絡み合い、急速に学際化が進むこのテーマについて、フランスから5名、日本から4名、スウェーデン、ベルギー、オーストラリアから各1名の計12名が発表と議論を行った。なお、2月27日には日仏会館にてディスカッション「人文

社会学におけるファッション研究の現状：日仏の比較」(日仏同時通訳付)を開催し、本セミナーのプレ企画として、東京におけるフランス語圏の研究者や一般観衆を対象にセミナー趣旨を発表・議論した。

Transboundary Fashion Seminar 5.1 Fashion Designers' Practices and Theories (2018年7月11日、文化学園大学)では、Elisa Palomino (ロンドン芸術大学、セントラル・セント・マーチンズ、ファッションプリント科長)が、ファッション産業の染色や大量廃棄がもたらす地球規模の環境破壊を背景に、アイヌ民族が衣服や靴に使ってきた魚皮を贅沢品産業の新たな素材とする文化的意味について発表、またClaudia Arana (文化学園大学)から廃棄される糸のアップサイクリング・デザインについての発表があり、デザイナーが取り組むサステナビリティについて議論をおこなった。

Transboundary Fashion Seminar 5.2 (Re)thinking Fashion Globalization (2019年2月15,16日、文化学園大学)では、Research Collective for Decolonizing Fashion 研究グループ(旧名称: Non Western Fashion Conference)との共催セミナーを開催した。各地域に焦点を当てる世界ファッション史が見過ごしてきた、地域の接触、影響、伝播などのつながりをいかに有機的に理論構築するかが焦点となった。インターネットを通じた国際研究発表公募に対して、62件の応募があり、セミナー共催者であるDr. Sarah Cheang, Dr. Erica De Greef, Dr. Angela Jansen 及び研究代表者による査読の結果、英国、オランダ、合衆国、オーストラリア、シンガポール、ケニヤ、日本から応募のあった16本を採択した。予稿集：<https://transboundaryfashion.files.wordpress.com/2018/11/booklet.pdf>

Transboundary Fashion Seminar 5.3 今なぜKIMONO展なのか(2019年2月23日、文化学園大学)は、近年「KIMONO」をテーマとした展覧会が国内外で相次いで開催される現状を分析するため、2017年パリのギメ美術館で「Kimono: Au bonheur des dames」展企画に参加した松坂屋美術館の荘加直子学芸員、ポーラ美術館「モダン美人誕生 岡田三郎助と近代のよそおい」展担当の山崎菜未学芸員を招き、国内のきもの研究者を集め、日本語でセミナーを開催した。

Transboundary Fashion Seminar 6.1 The Art of Wearing: Tradition and Innovation (2019年9月9,10日、文化学園大学)では、京都における第25回国際博物館会議(ICOM)のため来日したICOM コスチューム部会(The International Committee for Museums and Collections of Costume)と共同セミナーを開催した。研究発表の部では、Alistair O'Neill 教授(ロンドン芸術大学、セントラル・セント・マーチンズ、ファッション史・理論)から、2次元、3次元から4次元へ実験が進むパターンカッティングについて、Dr. Mei Mei Rado (パーソンズ美術大学)からは、20世紀初頭のラメ素材がいかにファッションに変革をもたらしたかについての発表があった。日本からは、本橋弥生(国立新美術館)から田中千代が提供したニューキモノについて、Saskia Thoelen (文化学園大学)から三越が琳派を復興したことでいかに着物を再定義したかについての発表があった。

ファッションとテキスタイルの収集・展示の専門家をグローバルに集めた14名の部会メンバーとともに浴衣着付けワークショップをおこない、着付けの美の作られ方を体験した。文化学園服飾博物館の「絣」展、松濤美術館「美ら島からの染と織」展、三菱一号館美術館「フォルチュニー」展見学会もおこなった。また、文化学園大学大学院生をリーダーに、銀座エリアと原宿エリアにおけるファッションのエスノグラフィ調査をおこなった。

(2) 成果概要と今後の展望

以上、グローバルな参加者を多領域から集めた連続国際セミナーから、次の二点が明らかになっ

た。「ファッションのグローバル化」とは、欧米のファッショントレンドが世界の他の地域で採用されるグローバル化の過程を指し、多様なファッションシステムが無視されている現状にあること、歴史的視点にたつグローバルファッション史は、近代の植民地秩序に基づく国家や地域の境界を保護し、他のファッションを差別・排除するための帝国主義的思考を前提としている点である。ファッションのグローバル化という概念そのものが、西洋中心主義のバイアスを保持しているのである。

近年の非西洋のファッションの生産と消費における成功の結果として、また、デジタルメディア技術の進歩で情報の境界が無効化した結果、この力関係のゆらぎが可視化されたと考えることが妥当である。

従って、越境するファッションを考察するためには、ファッションとドレス、モダンと伝統、西洋と非西洋、グローバルとローカルなどの従来の二分法は、無効である。ファッションに関して、今日に至る近代の植民地秩序に基づく不平等なグローバルな力関係を明らかにし、文化に関わる国民国家の境界保護や差別に異議を唱える観点が重要となる。

以上の研究成果は、西洋中心的なファッション言説モデルから脱却し、「西洋ファッションのグローバル化」を超えたファッション研究の将来性を提案する英文書籍として出版する（Rethinking Fashion Globalization, London: Bloomsbury, 2021年）。日本をプラットフォームとした国際セミナーの成果を、英文書籍として発信することで、西洋中心的な視点から離れた実践として国内外にインパクトを与えることが予想できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高木陽子	4. 巻 5
2. 論文標題 日仏共同セミナー：越境するファッションセミナー4.2：ファッションのなかのアート、アートのなかのファッション	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 NACT review国立新美術館研究紀要 = Bulletin of the National Art Center, Tokyo	6. 最初と最後の頁 338-351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Sarah CHEANG, Erica DE GREEF, TAKAGI Yoko	4. 発行年 2021年
2. 出版社 London: Bloomsbury	5. 総ページ数 -
3. 書名 Rethinking Fashion Globalization	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>HP: Transboundary Fashion Seminar https://transboundaryfashion.wordpress.com/</p> <p>国際シンポジウム開催： Transboundary Fashion Seminar 4.1 Batik in Global Perspective (2017年10月25日) Transboundary Fashion Seminar 4.2 Art in Fashion, Fashion in Art (2018年3月3日、4日) Transboundary Fashion Seminar 5.1 Fashion Designers' Practices and Theories (2018年7月11日) Transboundary Fashion Seminar 5.2 (Re)thinking Fashion Globalization (2019年2月15,16日) Transboundary Fashion Seminar 5.3 今なぜKIMONO展なのか (2019年2月23日) Transboundary Fashion Seminar 6.1 The Art of Wearing: Tradition and Innovation (2019年9月9,10日)</p> <p>出版： 高木陽子、「フランスにおけるデザイン教育の伝統と革新:国立高等装飾美術学校の事例研究」、2015-2019年度科研・基盤研究(A)15H01760 研究代表者:藤田治彦 『デザイン教育史の国際的比較研究-ディセーニョからメディアテクノロジーの現在まで-』、2020年、120-135頁。</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	トゥーレン サスキア (Thoelen Saskia)	文化学園大学・大学院生活環境学研究所・博士後期課程学生 (32674)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	本橋 弥生 (Motohashi Yayoi) (90817123)	独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・国立新美術館 ・主任研究員 (82621)	